山塔

斯波四郎

山塔

著者略歴
本名　柴田四郎。明治43年山口縣生れ。舊制第五高校中退。昭和12年毎日新聞に入社。「山塔」で第41回芥川賞を受賞。著書に「禽獣宣言」（昭和32年、朋文社版）かある。
現住所　東京都杉並區正保町112

昭和三十四年九月二十日初版
昭和三十四年九月三十日再版

定價　二七〇圓

著作者　斯波四郎
發行者　車谷弘
發行所　文藝春秋新社
東京都中央區銀座西八ノ四
振替口座東京七八七四三番

印刷　大日本印刷
製本　加藤製本

© 1959 Siro Shiba　Printed in Japan

目次

山塔 5
茉利子 57
故園 117
少女幻影 187
城外 239
あとがき 298

装幀 内田武夫
寫眞 田沼武能

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

山

塔

山

塔

故里の町

楓、楢、櫟などの紅葉で埋められた山が、深い溪谷にむかつて雪崩れてゆく。山峽にさしかかると汽車はトンネルからトンネルにむかつて走つた。

高架鐵橋にさしかかり、はるか谷底に白い壁の村落がみえたと思うと、たちまち高原めいた地帶を走つている。眼の前には巨きな岩がぬるでの紅葉した小枝にまつわられながら驀進してくる。

車内は國なまりの話聲がゆきかい、群鳥の森にいるようだ。山國らしい頑固な氣配をひしひしとおぼえる。抑揚にひめられた堅いひびきにまで忘れていた故里の匂いがある。

男は外套の襟をたてて外をみていた。

「その氣になられますなら、なんの、お世話になりました旦さまのお墓ですい。わたしがやりま

せいで。その覺悟はちやんと出來ておりますいの。というても、奥さま。わたしの口から申上げますと、石甚の奴が賣りこみよるといわれますからのう。それでは、わたしも心外でありますい。

今度の御命日まではと、こつそり、わたしは石を選んでとつて置きましたいの。なにも、石甚は賣込むわけではありませんがのう」

鳥打帽の中年男と圓顔のゆつたりした未亡人らしい氣品の女性が、隣席にむかいあつていた。いまはなき旦さまの墓碑を格安に刻みましようと石屋は口說いている風だつた。

素朴な愛情めいた口調のなかに駈引がはたらいている。と思うと、たちまち駈引ぬきの思い出ばなしや、靜かな述懷になつたりする。

少年の頃から一緒に遊んだ仲間意識がのぞき、旦さまの墓はおれの手でという一徹な念願がもえる。そのくせ、ちらちらと打算が閃くといつた有樣だ。

未亡人も微笑みながら、合槌のなかでしんなり胸算用しているようだ。條理をつくした言葉のやりとりに交つた打算の長ばなしを男は浮かぬ、かなしみ心できいた。

竹林や杉木立が、つぎつぎと移つてゆき、岩肌が車窓を墨繪のようにすぎてゆく。トンネルをでると樹林の羊齒群が印象的だつたりおかめ笹の小丘が現われたりする。眼をとじると、そのまま蒼みをおびた世界にはいつてゆくような氣持である。

根の國、根の國と男は心に呟いた。山蔭の町、山蔭の花なんだ。現實のQ町が、どんなに埃つぽい所になつていても、わたしが、これから入つてゆくのは蒼い淵のような故里でなければなら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

ないと思う。

長いトンネルをでると思いがけなく驛賣りの聲がした。男はびくつとした。ホームには田舍めいた長靴やあつし姿の三四人の乘客が立つていた。驛賣りなんか役に立たぬ小さな驛である。K市にある中學に通うのに利用した支線である。あの頃は驛賣りなんかいなかつた——バカな、三十年前のことではないか。變るのは當然だつたと男は苦笑した。

やがて列車は縣境にあるQ町に入つていつた。黑い服をきてパイプをくわえた背の高い男は、土地の人群れに交つて改札口に姿をあらわした。

木材の集散地であり、木材工場がそこここに見えるのは昔のままだつた。高原めいた清澄な空氣が頰にいたく、手の甲が、たちまち紅味をおびてくる。男は胸ふかく冷たい空氣をすいこみ驛前廣場につきたつた。

山と山にかこまれた山峽のQ町は、紅葉があらゆるところに耀きわたり、敬虔さをもつて男の胸にせまる故里の町のはずであつた。が、眼前の町は、どこか埃つぽくきめが荒くなつているようだ。

驛前には汚れたバスの群れがおり、何々ホテル、何々ハウスといつた靑ペンキの建物が並び、ネオンをつけた食堂や土產物店がある。男はあたりを見まわしたのち、少し離れた、わりに靜かな西洋料理店にはいつていつた。

虹鱒のフライのほか二三品とつたが、男は大した食欲もないようである。たちまち、ホークをおいて、フライにつけてある柚子の實の匂いをかいでみたりした。會計をすますと彼は手鞄をもつたまま、街並みなどには目もくれず、町はずれの小高い丘にある墓地にむかつた。

櫻並木のある墓地の坂をのぼりきつた男は、やつとわれにかえつたように、鞄を道端の石において、山峡の町をふりかえつたのち墓地に入つていつた。

青く翳つた墓の列のあいだを、彼は通りぬけ、やがて層塔をもつた山蔭家累代の墓というのに額いた。そして一段下にある兩親の墓碑の前に合掌した。

「山水河原者が先祖さまつて、ほんとうでありますかい」

父親の墓にむかつて彼はきいた。バカたれ、河原乞食といわれたものが士族になれるか——父の怒つた、髯だらけのイプセンのような貌がうかんだ。男はくすつと肩をすくめて笑い、立ち上ると錆びた墓碑群れを遠くみるような眼をした。

思いだしたように、彼は共同墓地にたつた一つあつた十字架の墓をさがしはじめた。外人宣教師の墓なのだが、どうしたことか、少年のころ、なんとなく憧れた異邦の墓は影も形もなくなつていた。

餓えた者には、いくら食物をとつても空洞がどこかに殘るものだ。生れ故郷を目のあたりに眺めながら餓えた狼のように立つている。

蒼みをおびた故里は、よほどうまく入口をさがさぬといりこむことはできぬからなと彼は考え

る。手輕く昔馴染みを訪ねたりしてはならない。一度、イメージが濁ればすべてが喪われるのである。

訪ねてみるべき家屋敷はすでにない。跡には組合病院がたつているということだ。クレゾールの匂いのする病院なんか、こりごりである。彼は意を決したように、墓地をでて小さな湖のある方に歩きだした。湖の岸の山奥に慈海寺がある。その日のうちに、慈海寺を訪ねる氣はないが、湖畔まで行つてみる氣になつたのだ。

湖畔までは、かなりの道程があつた。古びた旅館を湖岸の林間に發見したときは、さすがに疲れていた。少年のころ、翠明館があつたか、どうか思いだせない。戰時中までは舊い支藩の銅像が三つ四つ立並び公園になつていたので、昔からある宿とも考えられた。

宿帳に住所をかき、銀行員山蔭素吉と署名すると彼は奥まつた部屋に床をのべて貰い、晝間から翳つた部屋で、ひとり眼をとじた。山峽の紅葉を胸に灼きつけるため頑なになつていた。

生涯の落丁

湖畔の宿についた翌朝、彼は三十年前に父が墜落死した橋の方に歩いていつた。橋は山蔭地帶とQ町のあいだに深くほられた峽谷のながれ、榎川の上にかかつていた。

橋の畔までゆくと公孫樹が眞黄にかがやいていた。石の欄干にも、鋪裝された路面にも、扇形

の葉がしきりに散つている。欄干からのぞくと橋桁の下には碧い淀みがある。河瀬が音をたてて流れていた。

父が墜落したときは、欄干さえない淺瀬に立つた背の高い橋であつた。公孫樹の下で微笑している觀音さまの石像もなかつた。わずかな移りかわりだが、歳月はながれている。山蔭は落葉する梢をあおぎ、峡谷の紅葉をながめ、水中に横たわつた父の屍體を描いて刻をすごした。

知人とあつて話をするより、よほど純粹にふるさとが語つてくれるような氣がする。向う岸から老婦人と少女がやつてくるのが見えた。杉原のひとたちだろうか——石像の顔に雨でくつついている銀杏の葉をとりのぞくと、彼は避けるように宿にかえつてきた。

晝食まで岸邊の秋を緣側からながめたり、鞄のなかから本をとりだして讀んだりしてすごした。午後になつて、やつと慈海寺ゆきのために腰をあげた。秋草のいろづいた湖畔の徑を廻遊道路にで、樹影の滲んだ湖面をみながら、故里人をさけるようにしている奇妙な自分のことを考えるのである。

「第十五流の山水河原者か。それでも大したもんだ。われわれは第の字もつけられない何百萬、何千萬かの勤め人のひろがりのなかの一人だからな。小さな何千萬流の椅子をつかんだり、はなしたり、うろちよろ、うろちよろ走りまわつて、なんとか生きている。歸省などというより、山水のなかに憩いの墓地をもとめて舞いもどつた流民か、禽獸だろうね」

そんなことばかりが胸を去來した。山の中腹にある慈海寺の甍は杉木立のなかに紅葉を點じて

荘厳めいて仰がれた。石段をのぼるのをさけ山徑を遠まわりしてゆくと、流水によつて荒された地肌の道は思つたより曲りくねつて嶮しかつた。

やつと山門のわきにでると、鳩がとびたち、羽毛が、ひらひらと舞つた。山蔭は湖底のようなO町を、もう一度ふりかえつて杉木立のなかにある數々の塔頭のあいだをとおつて慈海寺を訪れたのである。

慈海寺の世話で、潭北院の離れにおちついてから、彼はほとんど町におりてゆくことはなかつた。境内を歩いたり、山傳いに附近の風景のなかに傷ついた獸みたいにうごきまわつた。家屋敷がなくなつたとはいえ、郷里の町にきて、ふるさとを、さらに探すというのもおかしないい方だが、彼の氣持では、そういうより仕方がなかつた。

一月前まで、山蔭は病院生活をしていた。一時は死の瀬戸ぎわまで連れてゆかれた。苦しい彷徨からひきかえすと、壁のなかのベッドで、彼は晝となく夜となく、夢うつつのなかを往つたり來たりした。ときによると、食堂の棚にも食卓にも、カタツムリが群がり、庭の繁みにも鋪道にさえ貝殼を背負つたものがあふれている光景をみつづけた。

森の町というのが、どこなのか、地上にはたして、そんなカタツムリのいる町があるのか。意識下の濕潤な町が、なにかの拍子に彼を包みこんだのであろうか。

少年のころ、父の急逝にあい、絣のきものをきて關門海峽の速瀬を連絡船の甲板にたつて九州にわたつてから、彼はずつと異郷の町を轉々としてすごした。成長するや高層ビル街の林立する

首都にすんで、朝夕、明治調の赤煉瓦のビルに通つてくらしている。

そんなわけで、つぎから、つぎへと友だちや學校、住みなれた家、見なれた街と別れをつげた。そのつど彼は自分の内面のものを置土産にして出發しなければならなかつた。棄て去つた土地にはほとんど訪れることはなかつた。郷里のQ町にも、高等學校のときと、母が逝つた大學時代の二度きりだつた。

郷里にかえりたがつたり育つた土地を訪れたがるなどということは、女みたいな感傷だと、ひどく簡單に考えて四十數年すごしてきたが、死の貌をみたとき、喪われた故里が、意識下でどんなに飢えたものになつていたか——愕然としたのである。

いつてみれば生涯の大切な部分を落丁したまま死にかけたのである。カタツムリの幻想にしても、單なる童兒めいた、その場かぎりのものでなく、もつと根の深い祈求の、または傷痕の發現にちがいなかつた。

生命の缺損した部分を癒すためには、郷里を再構成しなければならない。故里の再構成といつても、どこでなにをしたといつた物語を綴りあわせることではなく、大げさにいうと胎内にいたときの記憶というか、本能的な郷愁をさがしだし、吟味したうえで、その碎片をもつて自らの原像をかたちづくらねばならない。また、原像を据える背景というか、空間というか、風景をつくりだしたかつた。

彼の内面から現われてくる幻想は、いろんな樹木であつたり、岩であつたり、傷ついた禽獸だ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo